

# 変革期の破壊と再生研究序説

山澤 学

## はじめに

本書は、筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻による共同研究課題である「人類・文明史における「破壊」の歴史・人類学的研究」の成果を広く発信すべく編まれたものである。

私たちは、グローバルな現代文明を生きるなかで、革命・戦争・テロリズムなどの社会的暴力、あるいは自然災害、地球規模の環境破壊など、さまざまな形態の「破壊」に直面している。そして、「破壊」後には、新たな未来を構想し、到達するべく、「再生」への方途を模索する。このような状況は、人類・文明史における過去の変革期にもしばしば出現した。本書は、このような変革期に出現した戦争、および自然災害・環境介入に注目し、それらの「破壊」の後に人々がどのようにして「再生」の方法を見出してきたのか、多様な事例から検証することを通じ、現代の私たちに課されている問題を問いかけることを目的としている。

そもそも本研究は、平成13年(2001)4月に歴史・人類学専攻が旧大学院歴史・人類学研究科を改組して発足した際に構想され、開始された共同研究に淵源があり、その当初の成果は川西宏幸・立川孝一教授(現 名誉教授)の御尽力によって報告書『自然・人間・文化一破壊の諸相一』(以下、前報告書と称する)として刊行されている。以後も専攻担当教員がそれぞれ各論を展開してきたが、ある「事件」を機に、新たな展開を目指したことが本書を誕生させることになった。

ある「事件」とは、平成 23 年（2011）3 月 11 日の東日本大震災・福島第一原子力発電所事故に他ならない。歴史学・人類学のみならず、人文社会系の研究者すべてにとって、何ができるのか、何をすべきなのか、学問に向き合う者としての社会的責任を改めて問い質すことになった「事件」である。歴史災害学のような、過去の災害の過程・実態を解明することもそうしたものにあたるのかもしれないが、一方で、「災後」への取り組みに参加し、「災後」へ提言しようとする研究こそが必要なのではないか。身近にいる教員・大学院学生の間ではこのような認識（あるいは危機感）が共有されてきたように思う。

このような認識を共有した歴史・人類学専攻の中堅・若手教員は、たまたま平成 25 年度（2013）に大学院人文社会科学部研究科公開講座が募集されたのを機に、「変革期の社会と人間―「破壊」と「再生」の歴史・人類学―」という新しい基軸を打ち出し、先輩教員によって育てられてきた共同研究をさらに前進させ、その成果を社会に還元していこうという機運が高まった。その思いは、歴史・人類学専攻長をはじめ多くの賛同を得ることができ、3 年間にわたる公開講座を開催する運びとなった。同時に議論を重ね、研鑽を積むことによって到達した研究成果を上梓したものが本書ということになる。

## 1. 変革期の「破壊」

近年の温暖化、ゲリラ豪雨、大規模噴火、大規模地震など、相次ぐ想定外の自然環境の変化は、地球規模の環境変動と見られ、さまざまな警鐘を鳴らしている。また、「戦後レジームの脱却」という政治家のアピールによらずとも、アジア・太平洋戦争後 70 年を迎えた今、これまで常識とされてきた諸制度が変化しようとしている。女性の社会進出、終身雇用制、年功序列、税制における配偶者控除の廃止、フレックスタイム制など、グローバルな動きにも連動した労働環境の変化はその一例である。しかしながら、それらがどこに行き着くのか、着地点を誰もが明確に予想できる思想もまた示すことはできてはいない。

このような状況を見ると、現状はまさに社会と人間の「変革期」として受け止めざるを得ない。千本秀樹<sup>1)</sup>の所論に学ぶと、現状は、象徴天皇制・日米安

保体制の時代から次の時代へ向かう長い転換期にある。その始期は、中華人民共和国の天安門事件、東ヨーロッパの変革、労働組合再編による連合の成立、そして昭和天皇の死という象徴的なできごとがあった平成元年（1989）であるという。この年には、フランシス・フクヤマ<sup>2)</sup>の論文「歴史の終わり」が発表され、歴史家の一部に衝撃をもって受け止められたことも思い出される。「戦後レジームの脱却」の行く末が五里霧中にあることに象徴されるように、以後、四半世紀を経てもなお、次の時代への見通しが立たないまま、政治も、経済も、社会も、そして価値観も混迷し続けている。

その間に、さまざまな「破壊」が進行している。川西宏幸<sup>3)</sup>は、前報告書において、「破壊」を、人類・文明史における「破壊」と関わらせながら、三つの視点から説明している。

その第一は、暴力による破壊である。それを発動する主体と対象の相違によってさまざまなかたちを採り、人間系における私闘、抗争、戦争、弾圧、テロリズム、差別、いじめに加え、人間系から自然系へ向かう環境破壊、自然系から人間系へ向かう自然災害などを含めることができる。

第二は、供犠である。王殺し、易姓革命、死刑、魔女狩り、生け贄・人身御供（人殉・人犠）などがこれに当たる。

第三は、自壊（崩壊・衰滅）である。社会システムが肥大化し、維持できる臨界点を超え、危機管理能力が低下すると、潰滅に至る。日本の現状は、川西によればこの第三の範疇に入る。

「破壊」は、変革期の人間・社会を襲い、また、人間・社会自らによって引き起こされている。いうなれば、変革期を象徴する「破壊」を研究対象とすることは、人間の生き方、社会の深層を解明することを可能にさせることになる。

## 2. 「再生」への射程

本書は、前報告書が「破壊」に焦点をあてたのに対し、「再生」に力点を置いている。東日本大震災直後に「災後」ということばが社会を賑わせたが、これを経験した（あるいは経験している）現状をふまえた結果である。

東日本大震災は、物質的な被害のみならず、精神面にも大きな影響を残した。

多くの人々の無念な死、無敵だったはずの防災庁舎・堤防までもが無残な姿をさらす沿岸集落の廢墟は、被災時の映像とともに、我々の精神に大きなダメージを残した。福島第一原子力発電所事故とともに、種々の安全神話を崩壊させ、また、これまで限界があることをほとんど疑うことがなかった人々に電力や資源の枯渇を感じさせ、多かれ少なかれ生活スタイルの見直しを迫ることとなった。東日本大震災は、先に見た「破壊」の諸相をふまえるならば、「暴力」としての自然災害による「破壊」に他ならないが、一方で、人間・社会の自壊としても認識されたことになる。ここにおいて想い描かれた未来は、決して単なる過去の復旧・復元によるものではなくなった。

「再生」とは、現在進行中の東日本大震災の「復興」事業を想定するならば、単に「破壊」前の状態に復旧・復元することではなく、新たに未来を構想し、創造することである。同様に、戦争・紛争やその他の自然災害・環境破壊に対しても、その終わりを見届け、来るべき未来を想像し、創造していかなければならないのである。その際には、当該の人間と社会が直面する生活現実を「知的」に把握せねばなるまい。

このような視座に立つときに想起されるのが上原専祿<sup>4)</sup>が唱えた歴史的省察である。上原は、アジア・太平洋戦争の「敗戦」後に、虚脱からの脱出、低迷していた時流からの反転を企て、精神の主体性と能動性を確保するべく、生活現実を歴史としてとらえる知的行動を「歴史的省察」と称し、実践した。上原によれば、省察とは、観察に似ながら、その姿勢においていっそう模索的であり、また、認識に通じながら、その体質においてむしろ思索的であるとし、世界と日本、そして自己自身について加えることによってなされる。

日本の現状は、前掲した川西の所論においては、自壊の範疇にあたる。川西は、過去の幻影を追うのでも、いたずらに悲観するのでもなく、あるいは無関心を装うのでも、拙速に走るのでもなく、冷静な眼をもって「破壊を科学する」ことの必要性を提起する。「破壊」を悲観するのではなく、冷静に生活現実のなかでとらえ、模索し、思索することにより、主体的に、能動的に「再生」の方途を導き出す省察が必要なのである。

このような見方に立ったとき、過去の変革期における「破壊」と「再生」の様相を解明して提示することは、極めて重要となる。歴史学は、決して過去を

復原することを目的としているのではない。人類学も然りである。現代社会を知り、現代をよく生きるための方途として、過去に学ぶのである。本書では、個別具体的な「破壊」の事例を取り上げ、実証を重ねながら、変革期の「再生」を射程に入れ、挑むことにしたい。

### 3. 本書の構成

本書においては、変革期の「破壊」と「再生」を考えるために、「破壊」の事例として生活の場における破壊および戦争の暴力を取り扱うこととし、その二部によって構成する。

第I部「生活の場における破壊と社会秩序の再生」では、日本列島に発生した自然災害や人為的な環境破壊、国家へのテロリズム、さらには表象された風景美の破壊という、人々の暮らす場における多様な「破壊」の諸相を取り上げる。そして、それらの「破壊」の後に発現する社会秩序の再生のあり方を、さまざまな特徴的な事例に基づき解明しようとした5編の論文を収録することにする。いずれの論文も研究対象とする場に暮らす人々の眼差しに寄り添いながら、「破壊」と「再生」を考えるための論点を提示する。

1. 滝沢論文は、時期の異なる遺構が重複する複合遺跡に焦点をあて、大型古墳の造営にともなう集落の「破壊」と移動という現象に注目し、古墳時代中期後半から後期に集落・墳墓の分離・固定化が進むことを解明する。弥生時代以来の領域構造が解体され、族制的な集団原理の出現や首長権力による領域的支配へと向かう地域社会の「再生」過程を見通す。

2. 山澤論文は、天保9年(1838)に知識人真木の屋志げきが編んだ『信州あさま浅間山焼記』を手がかりに、18世紀後半の浅間山噴火という「破壊」の災害記録が再生産される意味を解明する。災害記録は、江戸時代以降に、過去の自然災害を単に回顧するためだけではなく、著者が社会を生き、「再生」させるための実践として作成されたものであるとする。

3. 中西論文は、松島(宮城県)の風景美が近代における商業用の鳥瞰図ちようかんず(松島真景図)や写真資料上において形成される過程を解明する。明治維新後に荒廃して「破壊」の危機に瀕したその風景美は、汽船が就航し、観光地としての

地位が上昇する明治 20 年代に近世的な構図によって「再生」され、さらに 40 年代を画期に近代的な構図へと変容する。

4. 伊藤論文は、昭和 7 年 (1932) の血盟団事件<sup>けつめいだん</sup>における茨城青年組の思想と行動を検証する。彼らは、生活する漁村地帯である茨城三浜<sup>さんびん</sup>の人情風俗を背景に、自我の救済という「再生」を成し遂げるべく、テロの実行と国家改造という「破壊」を引き起こした。その結果は、皮肉にも、「再生」を求められた国家を、政党政治の終焉と軍部の台頭という新たな「破壊」へと突き進ませていく。

5. 木村論文は、忘れがたき「破壊」である東日本大震災における記憶の継承のあり方として、意識・行動・モノ(木碑)<sup>もくひ</sup>に注目し、「災害文化」の視点から、被災地での「身の丈」にあった実践に寄り添って論じる。「再生」は道半ばにあり、その行く末を見極めるためには継続的な調査を必要とする。しかし、私たちにとって、人の記憶の限界と可能性、モノの限界と可能性を見極めながら災害の記憶を維持していくこと、さらにはさまざまな地域で行われている試行錯誤に学ぶことが重要であることは示唆に富むものである。

第 II 部「戦争の暴力と戦後社会の再生」は、二つの世界大戦とその戦間期・戦後期の「破壊」と「再生」を対象としている。戦争の「破壊」と戦後社会の「再生」、ひいては現代の世界を解く際に欠くことのできないキーワードと私たちが考えている「英霊」「女性」「知識人」「沖繩」の四つに焦点をあてて詳解する論文を収録する。

6. 村上論文は、第一次世界大戦後におけるヨーロッパでの英霊礼讃のあり方を考察し、19 世紀以来育まれていた国民共同体の伝統が「破壊」され、戦死の栄誉が英雄戦士から国民全体へと「民主的」に解放されたことを解明する。ヨーロッパは、このような「破壊」の経験から紡ぎ出された新たな記憶の文法を拠りどころにして「再生」を試みたが、その文法こそが再び未曾有の災禍へと導くものとなったと見通す。

7. 佐藤論文は、第二次世界大戦中アメリカの軍需工場におけるリベット工の女性ロージーの表象のあり方と受け止められ方をオーラル・ヒストリーによって検証する。本章で考察が加えられるオーラル・ヒストリーとは、史実とされてきた大きな物語を問い直す際に有益な、かつての「ロージー」たちの語

りである。公的なイメージと異なる「ロージー」の実像とともに、ジェンダー関係の変容、戦後社会における女性の自立に影響を及ぼしたことを詳解し、ジェンダー秩序の「破壊」と戦後における「再生」の実相を示す。

8. 中野論文は、GHQによる第二次世界大戦後日本社会の「再生」に参加した知識人（民俗学者）<sup>さくらだかつのり</sup>桜田勝徳の軌跡を読み解き、その現実社会と交わる場を構造的に解明する。桜田は、学術・行政・政治の密接不分離な場において、日本社会「再生」の使命感に則り活動していたが、その営為に対する認識は、知識人や学問が現実社会にいかにして関わるべきか、私たちの教訓としても深められなければならない。

9. 武井論文は、沖縄の軍用地<sup>にしはら</sup>西原飛行場の接収と返還をめぐる土地のあり方を検討し、戦前から戦後にかけての軍による接収にとまなう「破壊」を超え、計画の立たない突然の返還にとまどいながらも、日常を取り戻して「再生」しようとした人々の体験を解明する。沖縄の軍用地問題・返還問題は現代にまで続く課題であり、このような事例研究を積み重ねていくことの重要性を考えさせられる論文である。

以上の9本の論文による、本書のささやかな試みが、現代における多様な「破壊」と「再生」とを問い直す手がかりとなるならば幸いである。

## 註

- 1) 千本秀樹「国家に対抗する社会と原発責任」（『現代の理論』28、2011年）。
- 2) フランシス・フクヤマ（渡部昇一訳）『歴史の終わり』上・下（三笠書房、2005年。原書の初出は1992年）を参照のこと。
- 3) 川西宏幸「破壊の構図」（筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻編『自然・人間・文化—破壊の諸相—』、2014年）。
- 4) 上原専祿「新版への序」（『歴史的省察の新対象』、上原専祿著作集15、評論社、1990年。初出は1970年）。